多摩

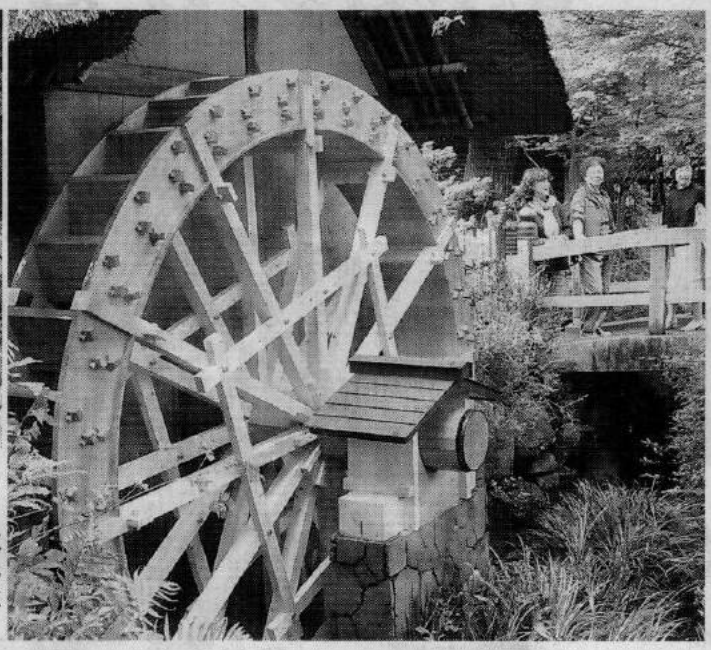
立川支局
〒190-0012
立川市曙町2-38-5
立川ビジネスセンタービル3階
☎ 042-524-5104
fax 042-524-5106
mail tachikawa@asahi.com
町田 ☎ 042-723-3251
八王子 ☎ 042-646-8511
青梅 ☎ 0428-24-3824
東京総局
〒100-0011
千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル3階
☎ 03-3508-0390

購読・配達のご用は
☎ 0120-33-0843
(7:00~21:00)
広告のご用は
☎ 03-3547-5550
折り込みのご用は
☎ 042-540-1971

深大寺水車 20年ぶり新装

8月ごろ「粉ひき」開始

ドッドッドッドッ。水車は水をくみあげ、音をたてて回り始めた。6日午前、調布市の深大寺水車館の水車が開館以来20年ぶりに新装された。直径3メートルの大輪や軸など、ほとんどの部品は真新しい木に替えられた。長野県の木曽の水車大工が3カ月かけて制作して、現地で組み立てた。



右新装され、勢いよく回る水車
左水車を新装した水車大工の原さん＝いずれも調布市の深大寺水車館

長野の専門大工、3ヵ月かけ製作

かつて深大寺の周辺ではわき水が小川になり、川に沿って水車小屋があった。住民は水車で玄米をつき精米をし、ソバの実や小麦をひいて粉にした。だが麦やソバの栽培が減り、電動モーターの普及などで、1955年ごろには水車小屋は姿を消した。

小屋があった場所に、水と人々の生活を結びつけるモニュメントとして水車小屋が復活したのは92年。小屋の中には、つき臼が三つとひき臼が置かれた。臼による精米や製粉は、食物の風味が保たれるといわれる。毎年、100人近い市民らがソバの実などを持って訪れた。

だが20年たち、軸の木は腐ってぼろぼろになり、大輪の回し始めは人力を借りることが必要になった。輪の回る速さは一定せず、粉をひきたいという希望があっても、運営する市郷土博物館は断るしかなかった。

市の全面リニューアルの依頼に応えたのは、開館時の水車を製作した長野県南木曽町の原康則さん(70)。庭木戸作りの職人だったが、85年から水車の製作を始めた。旧家に残る水車を調べ、歯車の仕組みも独学で学んだ、全国でも数少ない水車専門の大工だ。

立川市の昭和記念公園、府中市の郷土の森博物館、小平市のふるさと村をはじめ、全国に原さんが製作した水車は50にもなる。

原さんは3月、水車館の水車の設計にとりかかった。大輪の水受けはサワラ、中心から輪を支える雲手はヒノキ、軸はケヤキを使い、すべて手作りで仕上げた。

4日から水車館で、妻の美也子さん(66)や後継者として期待する八王子市の梅沢達雄さん(43)が手伝って組み立てを始め、6日に終了した。

水車の上流にある水路のせきの止め板をはずすと、水が流れ水車が勢いよく動き出した。それを眺めながら、原さんはうれしそうに話した。「完璧なものは死ぬまでつくれないけど、まあまあの出来。90点かな」

粉がひけるのは、臼の修理が終わる8月ごろになる。問い合わせは調布市郷土博物館(042・481・7656)へ。(園田二郎)